

第1回8020童話
児童の部 「最優秀賞」作品

「迷子になった前歯」

小学 4年生

なみちゃんは小学一年。

まだ一度もむし歯になった事がありません。

その理由は二つ、一つはなみちゃんが毎日欠かさず、しっかりと歯をみがいていることでした。二つ目はお父さん。お父さんは歯医者さんだったのです。

毎日お父さんに、きびしく歯をチェックされていたのです。

ある日、お父さんは出張することになりました。なんと一週間もなのです。

お母さんも友達と集まりがあるとかで、泊まりの旅行。

二人は出かける時冗談のように言ったのです。

「なみ、歯をしっかりとみがくんだよ。一日でも忘れると歯が一本なくなってしまうからね」

「な〜した歯は自分で探しに行かなければならないのよ」

二人が出かけて二日目。おはあちゃんはチェックはしません。

一日目はしっかりとみがきましたが二日目、夜みがくのを忘れてねてしまったのです。

夜トイレに起きました。洗面所の鏡に映ったその口は！なんと！ということでしょう。上の前歯が一本なくなっているではありませんか。「これって悪い夢だ」ほっぺたをひっぱりました。でも、夢ではなさそうです。お父さんが言った事は本当だったんだ！と後悔してももう後の祭りです。

「たった一回忘れただけなのに」

そして思い出したのがお母さんの言葉。今は真夜中。うんと怖いけどやっぱり探しに行かなきゃならないのかしら。

そっと二階の窓から庭をのぞくと何かキラリと光りました。

「あっ、あんな所にある」

なみちゃんは庭へおりてみたのです。

あったのは歯ではありません。古い歯ブラシだったのです。拾い上げてみると、なんとその歯ブラシには、目と鼻と口がついていたのです。

なみちゃんはびっくり！放り投げようとする歯ブラシは、怒るみたいに言ったのです。「待て！僕を忘れたのか。さんざん世話になっておきながら」

なみちゃんは思い出しました。

幼稚園の頃の、お気に入りの歯ブラシだったのです。

「僕がこんなに古くなるまで使ってくれたじゃないか。歯みがきの大切さを忘れるなんて。さあ、可愛そつな歯を探さなくちゃあな。

庭を出て東へ真っすゝ進め。屋根も壁も真っ白な家が建っている。そこは歯の家だ」

「歯の家？」

なみちゃんは首をかしげました。

そんな家見たことも聞いたこともなかったからです。

「とにかく行けばわかるよ。君の歯のこともね。ははははは」

と、歯ブラシは笑ったのです。

言われた通り言ってみると、本当に白い屋根の白い家がありました。

ドアを開けて入ってみると、とびうででしょう。そこは歯たちの楽園だったのです。

みんなで楽しそうに遊んでいる歯ばかりです。

とんがり帽子をかぶったような一本の歯が、なみちゃんに気がつきました。

「ようこそ。ここにいるのはみんな子供の歯なんだよ。つまり、みんな自然に抜けた歯は

かりなんだよ。

君も一本、前歯が抜けてるね。はははははははは
「そうなの。抜けてなくなっちゃったの。だから探し出して、もう一度口の中へ戻ってもらわなくちゃならないの」
すると歯は

「ははははは。君は子供の歯が抜けた後、大人の歯が生えてくることを知らなかったのかな。」

僕たちはすっかりみがかれて抜けたから、大人の歯にほめられたんだ。泣いている歯は、大事にされないまま抜けて、大人の歯に叱られた歯なんだ。ほら、あそこにも一人いるよ」「歯はくると、真っ赤に咲いているサルビアの花壇の方を向きました。

「あっ！」

なみちゃんは叫んでかけ出しました。

「みがくの忘れちゃったの。ごめんね」

たった一回なんて言い訳は、もちろんしませんでした。

「うん、だいじょうぶ。これからみんな抜け交わるけど、私達のこと忘れないでね」

待ちに待ったお父さんとお母さんが帰ってきました。

「そんなの夢だろう。はははははは」

「でも、ゆかいな夢ね。おほほほほ」

その夜、歯をみがこうとして鏡を見るじ、抜けた所からちよっと新しい歯がのぞいているのが見えました。

なみちゃんは小さな声で、ははははははって笑ったのです。